

文学的評価による Isaac Watts及び Charles Wesleyの宗教詩の比較

園 部 治 夫

はじめに

ヴィクトリア時代における最大詩人の一人 Tennyson は〈さんびか〉に対する見地を次のように披瀝している。「よいさんびかを書くことは、この世の中で最も困難なことである。よいさんびかとは、平凡で詩的なものでなければならぬ。平凡でなくなり、全く非凡な表現をすることにでもなれば、その瞬間、それはさんびかではなくなる。」(1)

さんびかは敬虔な宗教的情操を素朴で歌い易い音の言葉をもって表現されなければならない。たとえどのように秀れたさんびかでも、会衆によって歌われなければならない。真に秀れたものとはいえない。英国において、真にさんびかと名のつくものが創作され、又教会の会衆に迎えらるようになったのは、17世紀末 Isaac Watts の出現に始まり、Charles Wesley に引継がれてからである。それまで英国々教会、非国教会を問わず礼拝に使用していたものは、Psalter 〈詩篇歌〉又は、Book of Psalms 即ち礼拝用に編集した詩篇の韻文訳であった。その外に旧新約聖書の抜萃を材料として作詩したものも歌われていた。非国教会の代表的宗教詩人 Milton の遺髪を継ぐカルヴァン派の Watts と、最後まで国教会にふみ止まったアルミニウス派の Wesley と、この両さんびか作詞者の出現により、創作詩が礼拝に用いられる時代に至った。それは会衆に清新の気風をもたらし、ひいては信仰復興運動のきっかけともなり、一種の宗教改革をもたらしたといえよう。又この両宗教詩人を始めとして、それに続く宗教詩人達の作品に英文学史上時代を劃する浪漫派主義の文学がほうふつされる ことを見逃すわけにはゆかない。

I 現代英語さんびか作詞の先駆者 Isaac Watts

今日 Isaac Watts と Charles Wesley の名前を英国さんびか作詞者の最高位に列挙することは極めて当然のことであるが、その優劣の順位決定を問われて即答出来るものは、唯の一人もいないだろう。Wesley をなおざりにしては Watts を読むことは出来ないし、又 Watts の作品の偉大性は Wesley を充分理解してこそ始めて解るものといえよう。勿論歴史的には Watts の Psalms and Hymns <詩篇歌とさんびか> と Wesley のものを受け入れた夫々の教会の立場には極めて激烈な対立があった。

Wesley の文体から受けた感じは、Watts のものとは大きな開きがある。Watts は Wesley より僅か1世代早く生を受けているにすぎない。正確に言えば34才年長であるが、その語法はかなり異質のものである。Watts の作品を読んでいると、必ず異様な、奇妙な表現にたじろぐことがある。今日では全然見られない用語が、こんなにも多くあるかと思われる程随所に散見される。Watts の作品の大部分が今日さんびかとして使用されるのに困難を来しているのは、このためでもある。彼の著作は内容的に高度な気品を備えたものではあるが、ある意味では好古趣味に偏したものともいえよう。一方 Wesley の用語は現代語法とはごく僅少な懸隔があるのみで極めてなじみ深く感ぜられるものが多い。

然しともあれ、Watts の作品は当時教会におけるさんびか歌唱の草分けであったといえよう。さんびかは17世紀末より英国国教会で歌われるようになった。然しその歌詞は聖書にもとるものであるとして偏見がもたれていた。しかもその偏見は仲々あとを断たなかった。更に悪いことに、当時の英国さんびかは、質量ともに極めて粗悪なものであった。それ故聖書の言葉を忠実に弁えて作詩された Watts の作品が、礼拝に用いられたのは当然のことである。Watts 以降に表われたさんびか作詞者は、たとえ彼より秀れた作品を書いたにせよ、Watts に負う所極めて大なるものがある。

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

しかも Charles Wesley との比較においては、さんびかとしての Watts の作品は、Wesley より秀れていると見做されるが、さんびか歌詞作者としては Wesley より幾分下位に置くべきものと思う。

Watts 以前には韻文詩篇が現われ、又その多くが17世紀末に至るまで使用されてきた。然し現在、教会及び一般大衆に用いられているようなさんびかの形態が整うそもそもの緒となったのが Watts である。それ故 Wattsこそ現代さんびか作詞の先駆者といえよう。

II Watts 及び Wesley の宗教詩に対する文学的評価

1. 文学面に表われた宗教詩の新規準及びその語法

Charles Wesley の作品はさんびかの文学面における新規準を打ち立てたものといえる。彼の作品は文学的見地からいって、Watts の作品よりむしろ、それ以前の宗教詩人の作品と歩調を揃えていた。即ち Wesley は Watts の作詩法を批判し、彼なりに新しい規範——さんびかも詩でなければならぬ——を設定した。然し Watts の主張によれば、さんびかは詩の領域外にあり、詩とは分離し、詩的連想からも離れ、ごく平凡な理解力に應ずるように水準を下げて書くべきであるとしていた。これに対し、Wesley はさんびかは一種の宗教的抒情詩であり、抒情詩の効果をあみ出すべきものでなければならぬし、又一般大衆はさんびかの水準まで高められ、詩の美しさと妙想を感じしむべきであると主張した。このような基準で彼は Watts の作品のみならず、そのさんび集——Wesley の言によれば“よくないもの、つまらないものもあるが、極めて優秀なものもある”——を確めたのであった。(2)

世間と没交渉の生活を愛することが17世紀の主要課題であったが、それは浪漫主義前派と見做されていた。Watts は純真な程自然を愛していたが、彼は自

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

分の研究の扉を閉ざすことにより森林地における孤独感の精神的利得を発見することが出来た。彼は想像力に富みかつ宗教的情緒を深い流れの中に漂よわせた詩人であった。しかもその情緒は新古典主義芸術と、宗教の内面を流れており、18世紀に17世紀の熱情をもたらしたものであった。

Watts の先祖達は批判的、暗示的で迂遠な散文や韻文を書き残した。Wesley の先祖達はスマートで上品な作品をものにした。Common Metre (C.M.) や Long Metre (L.M.) で立派なさんびかを書くことは、たとえ Metre〈格調〉を自由に駆使することが出来たとしても、容易なことではない。然も Watts はいつでも使い馴らせる Metre を見出せなかったのである。Wesley が作詩に際して振舞った韻文の自由さは彼が英語さんびかに与えた著るしい韻律上の進展をもたらしている。新さんびか作詞に当り、Watts は旧詩篇歌にある単純な格調に、その範囲を留めてしまった。これは会衆の音楽的限度に対応せんためになされたものであった。然し Wesley は極めて無理のない効果的韻律と格調で自由に筆を進めている。あるものはドイツの原作から、又自分自身の作品から思いついたものもある。然しこの点 Watts は自分のさんびかにおいても先駆者であった。彼には詩篇をキリスト教的に解釈した先祖があったとはいえ、彼ほど周到にその仕事をなすとげたものはなかった。又 Watts の詩の用語中には、不幸にも既に古語として省みられなくなったものが多く、そのため、かつては詩篇歌又はさんびかとして荘厳そのものであったものが、今では滑稽にさえ見える言葉となり、それが一節一節をぶちこわしているときさえいわれるようになった。それは Joseph Addison (1672—1719) を契機として語法が大転換をしたからである。Wesley が Watts に較べて遙かに古風の域を脱し、時代遅れでないのはこのためである。勿論 Wesley にしても今日では奇異に感ずる表現が見られないわけでもないが、Watts においては、これが目立って多いのは当然のことだろう。ごく卑近な例をあげると、‘Should the earth’s old pillars shake’ にある ‘old’ は当然 ‘ancient’ を意味するもので、彼以後にはその意味での ‘old’ は姿を消しており、又 Watts が好んで随所に用いた感嘆

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

詞 ‘Well’ は、欽定約聖書の翻訳者が読者に向けて、荘重な態度で呼びかけて用いたもので、17世紀の遺産として Watts が継承したものである。即ち次の “Well, let the sea shrink all away,” “Well, Redeemer’s gone,” “Well, if our days must fly,” 等にみられるように、‘Well’ は彼の荘厳な詩句に、異様な口語体的筆致を与えており、これは彼の趣好が18世紀ではなく17世紀において形成されていたことを示すものである。

文学的才能に恵まれた常識の詩人 Wesley はその詩作に当り、明瞭、実在性、迫力——この三要素は特に魂を救うためのさんびかに不可欠なもの——を表明する用語を極めて適切に使い分け、その言わんとする所を最も簡明に、卒直に実情に則して詩に託しているため、大衆の心を強く捕えている。Wesley は決して抽象名詞や、微妙すぎる形容詞を用いて己れを衒うことをしなかった。具体的名詞、実効的動詞、平明な比喩こそ彼の縦横に駆使した材料であった。自分自身、もうろうたることを潔しとしなかった。時には博学すぎる引喩を用いたため、これを読むものは理解に苦しむことがあっても、一度それが解ると却つてその内容の単純なことに驚くほどである。その作風は単純にして明確であり、しかも気分は極めて明朗な Wesley の宗教詩は、あくまで庶民を代表する抒情詩人のものであるに対し、神秘的なまでに荘重にして敬虔にみちた Watts のものは、古典時代に生を受けたものとして、些かうるおいと情味に乏しいことはまぬがれない。

2. 脚韻及び格調では Watts に勝る Wesley

Watts は必ずしも押韻法に長けていたとはいえない。その作品に用いた母音と重母音の発音の変化には幾分手心を加えなければならない。さんびかにおいては alternate rhyme <交互脚韻>が最も普通に又多く使用されている。即ち第1行は第3行と、第2行は第4行とその脚韻を押韻させるもので、Watts,

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

Wesley 両者とも、その線にそって作詩したものがその作品中でもかなり多くを占めている。Watts は又、まれにみる程多く、第2行目と第4行目とを押韻させている。しかも彼にはそれがわけなく出来る。これとは対照に Wesley は第2行と第4行は勿論、第1行と第3行を常時押韻させているので、より引き締った詩行を生み出している。例をあげてみよう。

Watts の例：

Before the hills in order stood,	a
Or earth received her frame,	b
From everlasting Thou art God,	c
To endless years the same.	b

Wesley の例：

Hear Him, ye deaf; His praise, ye dumb,	a
Your loosened tongues employ;	b
Ye blind, behold your saviour come	a
And leap, ye lame, for joy.	b

上例 Watts のものは第2行と第4行の脚韻が完全に押韻してはいるが、第1行及び第3行は不完全脚韻 (a b c b) である。然し Wesley の例によれば、第2行と第4行は勿論のこと、第1行と第3行も完全に脚韻が並び (a b a b)、その上第1行の *Hear—Him—His*、第3行の *blind—behold*、第4行の *leap—lame* と alliteration <頭韻> を用いて全体を引き締めている。次の Watts の例は彼の作詩したさんびか中最も秀れたものとして知られたものであるが、その第1節と第2節をあげてみよう。

Jesus shall reign where'er the sun	a
Does his successive journeys run	a
His kingdom stretch from shore to shore,	b
Till moons shall wax and wane no more.	b

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

To Him shall endless prayer be made, a
And praises throng crown His head; b
His name, like sweet perfume, shall rise c
With every morning sacrifice. (3) d

この2連の4行詩において、第1節では a a b b と押韻しているが、第2節では脚韻が4個とも *made—head, rise—sacrifice* は全部不完全であり、又 *name—perfume* も押韻していない。頭韻は第1節に *shore—shore, moons—more, Wax—Wane* があるのみ。このような不手際な押韻の Watts に較べ、明らかに Wesley の方が優れている。それは Wesley には生れながらの音楽の素質があり、又彼のラテン語詩に稀にみる才能を発揮している所をみても解る。

Watts の作品には勿論であるが、Wesley も相等多くの不完全脚韻及び母韻はあるが、その為に Wesley の詩行は、読者が始め思った程には、弱まっていはいない。これは Wesley が Watts と違って押韻を意図せずしては作詩していないからである。第2行と第4行の押韻がたとえまずくとも、第1行と第3行とはこの欠点を充分補なっている。Watts においては、余りに無関心の場合が多いため、自分の安全弁を用意しそこなってしまうのである。だから一つの香ばしくない脚韻があれば、僅か1個であっても、その詩行の機能を不能とってしまう。このように両者の相違が極めて顕著なため、もし Watts のものを一気に数頁読み、最高になだらかな、しかも完全に押韻したさんびかであることに気がつくと、自ずと口から次の言葉が出てくる。「なに、それ位なら Wesley でも書けたのに。」というのは Wesley の最上のできは、Watts のものと殆ど変らぬほど完璧であるから。次に又 Watts の最もなだらかな詩を2節あげてみよう。

Not all the outward forms on earth, a
Nor rites that God has given, b

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

Nor will of man, nor blood, nor birth,	a
Can raise a soul to Heaven.	b
The sovereign will of God alone	a
Creates as heirs of grace,	b
Born in the image of His Son,	c
A new, peculiar race.	b

第1節の End Rhyme <行末韻> は a b a b と第1行と第3行及び第2行と第4行とは完全に押韻しているが、第2節では a b c b と第2行と第4行の行末韻は押韻しているが、第1行と第3行の行末韻は不完全脚韻である。なお Watts の他の1例をあげてみると、

Nor eye has seen, nor ear has heard,	a
Nor sense, nor reason known,	b
What joys the Father has prepared	c
For those that love the Son.	d

この1節は各行に夫々1つずつの完全脚韻と不完全脚韻を有している。即ち第1行と第3行及び第2行と第4行の行末韻は夫々不完全であるが、第1行と第2行内に Identical Rhyme <同音脚韻> として 'nor' が夫々行内で押韻し又第3行の what—has, 及び第4行の loves—on が母韻として夫々押韻している。Watts の用いた rhyme にはこのように極めて無雑作に、又不用意に使われたものがある。次にあげる divine—sin, steal—will, cradle—table, feed—bed, scenes—pen, dumb—room, suns—once, bestows—lose, stand—man, sport—dirt, boughs—grows, growth—truth, 等も不完全脚韻であり、脚韻本来の優雅さをこわすものとみる批評家さえある。たとえこの程度の不完全脚韻は Watts の時代では黙認されていたかも知れないけれども。然し Watts はこのような不完全脚韻、母韻、及び大きな効果をねらったために使用出来ない筈の

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

脚韻を意識して大胆に用いたのではあるまい。彼が rhyme and metre〈脚韻と格調〉の優雅さに対して全く無関心であったためといえよう。Watts の作品数百篇中より精選された最良の20数篇が現在使用されており、しかもその中にこのような稚拙にみえる脚韻をふんだ作品もあり、又その中に見出される少なからざる語句が現在使えば滑稽と笑われ、奇怪と感ぜられるにも拘らず、堂々と大衆の心に喰い入っているのを見逃すことは出来ない。それこそ他の如何なる敬虔に富んだ信仰の書といえども、これには遠く及ぶまい。これに対し、Wesley の洗練された優雅な脚韻美は彼の 老大な数にのぼる宗教詩の随所に発見出来る。又 Watts と Wesley の用いた metre〈格調〉を比較してみると Watts は自分の詩を古い Psalmody〈詩篇歌〉に使っていた simple metres に局限しているが、Wesley は前述の rhyme 同様、metre も含めて自由に使いこなし、その作詩中には 30箇の metre を用いたものさえある。Wesley は又 psalm 特有の Iambic metre〈弱強格〉の代りに Trochaic metre〈強弱格〉をも巧みに取り入れている。そこに彼の新鮮味もあるといえよう。さんびかで一番多く用いられ、又それ迄の Psalm Book にも使用され、歌として歌い易いのは Iambic tetrametre〈弱強4歩格〉と Iambic trimetre〈弱強3歩格〉であるが、Wesley の作品中白眉をなすものに Trochaic tetrametre〈強弱4歩格〉が多く用いられ、Iambic 以上の効果を表示している。あらゆるさんびかの中で最も普及したものとされている次の一節をみてもわかる。

／・／・／・／・
Jesus, Lover of my soul,

／・／・／・／・
Let me to thy bosom fly

／・／・／・／・
While the gathering waters roll,

／・／・／・／・
While the tempest still is high:

／・／・／・／・
Hide me, O my Saviour, hide,

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

 / . / . / . / .
Till the storm of life is past;
/ . / . / . / .
Safe into the heaven guide,
/ . / . / . / .
O receive my soul at last. (4)

彼は又 Iambic metre と Trochaic metre とを交互に用いて Trochaic tetrametre <強弱4歩格> と Iambic trimetre <弱強3歩格> とで織り合わせ、Alternate line <一行交替>の効果をあげている。

 / . / . / . / .
Who is this gigantic foe!
 . / . / . / .
That proudly stalks along,
/ . / . / . / .
Overlooks the crowd below,
 . / . / . / .
In brazen armour strong?

次に Iambic と Anapaest <弱弱強格>の混合は Wesley のさんびかの最も感動的、激情的、情熱的な面を表わしている。

 . / . . / . . / .
Thou Shepherd of Israel, and mine
 . / . . / . . / .
The joy and desire of my heart,
 . / . . / . . / .
For closer communion I pine,
 . / . . / . . / .
I long to reside where Thou art.

Iambic Anapaestic で 10 syllable <10音節> と 11 syllable の組み合わせ即ち 10 syllable よりなる 4 行の均衡を保った詩行 (4 symmetrical lines) は最も歌い易いものである故、会衆からは絶大な拍手を以て迎えられている。

 . / . . / . . / . . / .
Ye servants of God, your Master proclaim,

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

. / . . / . / . . /
 And publish abroad His wonderful name;
 . / . . / . . / . . /
 The name all victorious of Jesus extol;
 . / . . / . . / . . /
 His kingdom is glorious, He rules over all. (5)

次に修辞学的に注目に値する Chiasmus <交錯配列法>を巧みに駆使している例を Wesley のものからあげてみよう。前述の作品 ‘Jesus, Lover of my soul’ の第3節の第3行以降である。この Hymn は敬虔の念を燃やすにはふさわしいものと賞賛はされても、文学的には秀れたものとはいえないという非難を受けることもあるが、万人に大きな宗教的慰安を与えたこの詩の次の4行を見逃してはならない。

Just and holy is Thy Name,	A
I am all unrighteousness;	B
False and full of sin I am,	B
Thou art full of truth and grace.(6)	A

ここに登場するのは救主 (Thy Name と Thou で代表している) A と、罪人の自分 (Iで代表される) B で、前者が第1行と第4行に、後者が第2行及び第3行に A~B, B~Aという対照の形で表われている。又各々の救主Aグループと罪人Bグループも次のように小さく <交錯配列>されている。即ち救主 (Just and holy と full of truth and grace)の a と、それを受ける (Thy Name と Thou) のb 及び罪人 (I) の a と、それを説明する形容詞句 (all unrighteousnessと full of sin) の bの配列である。即ち

Just and holy is Thy Name,	a b
Thou art full of truth and grace.	b a
I am all unrighteousness;	a b
False and full of sin I am.	b a

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

このように僅か4行のしかも極めて簡明な用語から大小二重の効果的なあやが織りなされている。これは明らかに Wesley が詩人としてその文学的才能と作法技巧とを当時既に遺憾なく発揮していたからといえよう。

一方 Watts をみても、スケールこそ Wesley には及ばないが、見事な Chiasmus を残している。又同時に Watts はヘブライ語の詩に多くある Parallel Sentence <並行文>を自分の作詩中にとり入れており、語、句、内容等の繰り返しの使用は Watts の顕著な特徴の一つでもある。

Down to the earth was Satan thrown, A
Down to the earth his legions fell, A
High on the cross the Saviour hung, B
High in the heavens He reigns. B

第1行の *Down to the earth* と第2行の *Down to the earth* がパラレルし、又第3行 *High on the cross* と第4行 *High in the heavens* もパラレルしている。このような並行体と Chiasmus とを交互に取り入れたものがある。

See from His head, His hands, His feet,
Sorrow and love flow mingled down.
Did e'er such love and sorrow meet,
Or thorns compose so rich a crown? (7)

この第2行と第3行がそれであるが、又この作品は完全な脚韻 (*feet—meet, down—crown*) をも備え、その上見事な頭韻 (*His head—His hands—His feet, such—so*) と母韻 (*see—feet—meet, such—love, flow—compose*) とを揃え、凡そあらゆる技巧が極めて自然にほどこされている。

Ⅲ Watts のカルヴァン主義と Wesley のメソジスト主義

Wesley は自作の詩において第1の課題として、“神と人間の魂”の問題を扱っているが、Watts が扱ったようには時間と空間に興味を示していない。Wesley は自分自身常にカルバリーに在り、宇宙の他の如何なる場所にも関心はなく、彼にとって歴史的、時間的経過は永遠の現在においては、無に等しいからである。これは一面 Wesley 自身の強烈な信仰体験の所似であり、又他面、その受けた教育は Watts に較べて遙かに遜色を呈していたからである。然し Watts とてこの“魂の問題”にはふれている。但し彼の場合宇宙を背景として扱っている。Watts は Wesley 以上に十字架をその思想の中においている。即ち全てのものが受肉と受難を望むか、望みを失うかである。Watts はカルヴァン派の Milton が見たように十字架が果しなき彼方の宇宙に取り巻かれている球体の上に立てられているのを見た。彼にはそれが、時の始まる以前にも、又時の終りが決定的であっても、パレスティナの地に備えられているのがわかる。Watts には自然の広大さ、時間の無限さ、永遠のおそろしさのわかる感覚能力があるが、Wesley にはその能力が無いか、又はあっても弱い。Watts の作品中で白眉として最大の賞賛を勝ち得ている次の1篇からもそれを知ることが出来る。

When I survey the wond'rous cross
 On which the Prince of glory died,
My richest gain I count but loss,
 And pour contempt on all my pride.

Were the whole realm of nature mine,
 That were an offering far too small;
Love so amazing, so divine,
 Demands my soul, my life, my all! (8)

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

この句 ‘the whole realm of nature’ ほど、Watts の特徴を表わす思想も表現も他の詩の中には容易に見出せない。これは又彼の博学な哲学思想の反映でもある。Wattsが ‘自然界全てを思い浮べ (survey),’ その真中で十字架にかけ死に給うた救主を見出しているのがわかる。ここで用いた ‘survey’ は、罪人が救主を見上げている時に用いる冷たい、幾分形式的な語であると解されるが、これ又 Watts の専用語である。これは一粒の砂の世界と、1時間の永遠を知っている17世紀はやりの詩人の語である。John Bailey のように Milton 程よく空を感じさせてくれる詩人はない。そしてこの点で Watts は Milton の門弟である。彼のさんびかにはいつも大空の廣大無辺が画かれてはいるが、人類の救済の場が開かれる程大きな時間と空間の広がりを見つめることは出来ない。それで Watts はそれを ‘survey’ <思い浮べる> しなければならない。この廣大無辺を<思い浮べる>Watts の心は、そのままカルヴァン主義者の神の国を知ることに通じている。しかもメソジスト派の宗教詩にこの Watts の自然の偉大な領域が極めて自由に取り入れられているのは決して偶然ではない。Wesley 自身その福音主義の信仰を表現するに際して、数えるにいとまもない程多く使い始め、彼等の手本としている。メソジストさんびかの開花の源として Watts が Wesley にこの面で大きな支えとなっているのを見逃してはならない。このような形で Methodist 派は Watts の宗教詩より驚くべき程多くのものを所謂信仰の宇宙的背景とも称すべきものへ移入するようになった。即ちこの人達こそ Watts の真価を最高に評価したものといえよう。

Watts は作詩に当り、その聖書の引用を旧約聖書からしているものが多い。しかもそれを文学としてより神話として引用した場合が遙かに多い。新教徒の英国、特に清教徒の英国にとっては、旧約聖書は当時既に真の国民神話となっていた。厳とした17世紀の伝統を受け継いだ Milton と、18世紀初期のカルヴァン主義の洗礼を受けた Watts にとってこの神話は心理的に欠くべからざるものとなっていた。それは腐植であり、堆肥であり酵素であり、根を温める熱

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

であり、その一つでも欠けるなら、彼等の想像力は芽も出し得ず、開花もしなかつたと思われる程、貴重な要素となっていた。なお現在使用の日本語さんびかに Watts の作詩した歌詞は17篇あるが、それらの作品中旧約聖書よりの引用は12篇、残りの5篇が新約聖書よりの引用となっている。これと反対に Wesley のものは、全部で14篇が掲載されており、そのうち4編のみが旧約聖書からの引用で他の10編が新約聖書となっている。初期の Methodists <メソジスト主義者> は彼等の営んだ生活が精神を煽動させるような雰囲気であればある程、旧約的神話から遠ざかっていった。彼等にとって大切なのは聖書の歴史的眞実であったからなのである。又 Wesley の引用した新約の大部分は4福音書であり、そこから彼の殆ど全ての比喩的描写は勿論のこと、彼の語法の多くも取り入れられている。彼は福音書に心酔しきっているので、これを引用する際2行にわたって夫々繰返して用いている。その上これらの繰返しは重複する場合も三重復する場合もかなりある。それも一度に数個の文脈に関するものもありたとえば新約聖書を通して解釈した旧約聖書の引用——それに類似の最も代表的現代作品 T. S. Eliot の Waste Land <荒地> にみられる複合方式の引用——がそれである。

17世紀の終り頃一般礼拝用として歌われていた Old Psalters <旧詩篇歌> は英国民の宗教生活と思想を支配する根強いカルヴァン主義の威力の発露であった。それは国教会、非国教会を問わずいえることであった。英国人の宗教的意識と慣行を形作っていたのは実にこのカルヴァン主義の風潮であり、その改革思想は彼等の生活に滲透してきた。唯例外とする所は、国教会はねばり強さをもってその監督制度を守り通したことであった。Luther の影響とドイツ型の改革思想はこのように英国の宗教会に波及してきた。Wesley 兄弟 (John と Charles) の著名な作品こそは、この後者の影響をその国教会の伝統と遺産とによって受け継いだ洗鍊さと内容の充実さとをもって優勢ならしめたのである。これこそは忘却看過され易いメソジスト運動の一局面であり、英国民の宗教思想を変えた端緒といえよう。それは有力な、一見殆ど信ぜられぬ程の業績であ

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

った。Wesley 兄弟がその仕事を始めた当時、カルヴァン神学は英国宗教指導者の精神界を支配していた。然しその終局は所謂信仰復興運動が国教会、非国教会の両教会において火蓋を切った。カルヴァン主義の残滓は聖化され変化されたものとなって表われた。Watts によって予示された変化は Wesley 兄弟によって実現され、実行された。それは第二宗教改革、或いは宗教改革内の宗教改革とも称すべきものであった。この仕事において、さんびかが演じた役割は極めて大きい。丁度 Luther の業績において、彼のさんびかが果した役割に匹敵するものであった。会衆に歴史的に歌うように奨めることが〈完徳の勧め〉であるかも知れないが、もし彼等がそうしたとしても、新方式の Wesley のさんびかのもつ意義が彼等にはわかった筈である。作者の心には決して国家、階級、人種の差別はなく、神自ら創造された凡ゆるものに手を差し伸べ、それを懐き給う自由な、身に余る、普遍的な神の愛に対する思いと驚きがあったればこそ、純粹な宗教詩が創作されるようになり、それがさんびかとして歌われるようになったのも当然のことであろう。

IV 英国々教会に優勢を誇る Watts と Wesley のさんびか(9)

Watts と Wesley の受けた教育と交際範囲は対照的であった。Watts の信仰はカルヴァン主義に立ち、その作品は非国教会で用いられていたが、一方 Wesley はアルミニウスの信仰を継承し、教育は国教会派に属していた。このような事情ではあったが、国教徒間において Watts の与えた影響は最初から Wesley にも及んでいた。18世紀の教会で最初に出版された hymn-book 〈さんびか集〉は John と Charles Wesley 共著の“Collection of Psalms and Hymns”〈詩篇さんびか集〉であった。これに掲載されている70篇のさんびか中、半以上が Watts のものであった。然しながら教会でさんびかが歌われる

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

ようになった最も顕著な進展は信仰復興運動の影響によるものであった。福音派さんびか集の第一巻は Maden の “A Collection of Songs and Hymns, Extracted from Various Authours” (1760) <諸作詩者の作品から抜萃した歌とさんびか>であった。そこには当然のことながら Watts と Wesley が諸作詩者中で質量ともに最高にして最大の作品を掲載していた。1776年に Augustus M. Toplady (1740—1778) (10) は, “Psalms and Hymns for Public and Private Worship” <礼拝用及び私用詩篇さんびか集>を出版した。これには他に数名の新人が加わってはいるが, Toplady も又 Watts と Wesley を最上位に配列した。降って “Olney Hymns” (1779) (11) も同じく信仰復興運動から最大の影響を受けている。英文学において浪漫派時代に相当する 1785年より 1819年に到る34年間にさんびか歌唱を奨励せんとする福音主義派達の努力は、個々の教会がさんびかと詩篇を同等のものに見做すようになった所謂<妥協時代>をもたらすに到った。その後国教会徒の中では依然さんびかに反対を唱えるものがあり、1819年 Thomas Cotteril (1779—1823) が自分の作品 “A Selection of Psalms and Hymns” <詩篇さんびか選集>を Sheffield の St. Paul 教会において強制使用を迫った。それに伴う訴訟で York の大主教は最終判決を受け、教会の礼拝に祈禱書の外、さんびかも自由に使用出来ることとなった。

1821年から1850年に至る30年間は教会さんびかの満開の時代といえよう。多数の国教会新作詩者が雄名を馳せ、さんびか出版の気運が熟してきた。1861年名著 “Hymns Ancient and Modern” <古今さんびか集>が出版され、それが国教会における Watts—Wesley さんびかの隆昌の最後を飾るものとなった。国教会における両者の人気は、Wesley の方が遙かにうけがよく、1909年出版の “Hymns Ancient and Modern” (12) には、Wesley の作25篇、Wattsの作は僅か9編であった。寄稿数順位では Wesley が第2位、Wattsは第11位を占めていた。Watts のカルヴァン主義と訓戒的教訓がましきとは、次第に抬頭し始めた国教会派の歌人に地歩を譲らざるを得なくなってきた。

V 対等に評価される Watts と Wesley の宗教詩

1898年、Louis F. Benson 博士 (13) により英語さんびか 107冊中最も人口に膾炙されているものの調査を行った際、32篇のうち5篇が Watts の作で第1位、Wesley は合作の1編を加えて4篇で第2位であると発表した。(14) 統計的見地からいって Watts は今日英国伝統のさんびか作詞者中において上位を占めている。然し選定されている作品が代表作であるとみれば、今日の人気は Wesley が Watts に勝るといえよう。ただ Wesley の作詩数は約6,500篇で、Watts は695篇のさんびかを作詞したことを念頭におかなければならない。その上さんびか集にあるさんびかの数その分野における作者の地位を表わす唯一の指標にはならない。特に目立った作品の人気及び影響力も考慮に入れなければならない。“Presbyterian Hymnal” (1920) <長老派教会さんびか集>から Adams Otis は 1928年に英語さんびか中で最も重要であると考えた71編を選定した。そのうちで Watts のものは4編で第1位を占め、Wesley は3編で第2位を占めていた。(15)

もし Watts と Wesleyを一語で比較するように求められるなら、些か気おくれ気味ではあるが、Wattsの方が人間生活に対し、より大きな心、より広い見解を有し、又キリスト教の啓示に対してより哲学的な接近をなしているといえるだろう。Wattsには又独創的な詩作がある。時折 Watts は Wesleyのどの句にも見られない程立派な又至妙な句を打ち当てている。然し Wesleyの方が秀れた芸術家であり、かつ又更に確実なフライを打っている。彼には失策など殆どない。高処に達することも多いが、余り高すぎる処へは行かない。彼の作品は概して Wattsを凌駕している。然し義解する能力では Wattsの方が勝り、聖書を実によく自分の言葉で置き換えている。然しこれとて必ずしも聖書に有利とはいえない。これに反して Wesleyは義解することは不得手であった。彼は自分自身の考えを聖書の言葉でいい表わし、しかもその方が常に見ばえがしている。何れも聖書的であることに変わりなく、唯聖書にもとづく両者の

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

やり方に相違があり、しかも文学的機運では Wesleyの方に歩がある。Wattsには Wesley がそれまでなしたより更によく、又自分自身がそれまでなしたよりもっとよくやろうとする気概があった。然し要するに彼等は一つである。そして彼等は、我々がキリスト者であり得る限り、キリスト者であるという、全く明確な理由を掲げている。それ故両者間の比較を求められても、今日では殆ど、又は全然興味をひかない。然し19世紀には激論がかわされたものであった。その一端をあげてみると、1825年 James Montgomery (1775—1854) のさんびかに関する古典的論文 “The Christian Psalmist” <詩篇作者>で Wesley は Watts に対して無状件で勝利を譲った。然し Wesley がこのような差別をうけたことに対して異議をとらえたメソジスト一派の猛烈な反対があった。又組合教会派 (16) とメソジスト派間の論争は 20世紀に至るまで公共刊行物に特記されていた。しかも両者ともゆずらず初一念をかえなかった。

さてこの両者の比較に対する質問の最後の回答は、さんびかがもたねばならない必要条件に対する各自の見解に最終的に待つ以外なさそうである。Watts は客観的に物を観察する古典派に属する 現代英国さんびかの創始者であり、一方 Wesley は情緒豊かな浪漫派詩人として伝統を継承したものといえよう。要するに Watts, Wesley 両人の宗教詩がさんびかの世界に与えた影響は実際の所、全く同等といって差支えあるまい。

註

- (1) “A good hymn is the most difficult thing in the world to write. In a good hymn you have to be commonplace and poetical. The moment you cease to be commonplace and put in any expression at all out of the common, it ceases to be a hymn.”—Alfred, Lord Tennyson’s talk to Professor Herbert Warren, 1892. Tennyson, A Memoir; One volume edition, p. 754.
- (2) Journal, by John and Charles Wesley on December 5, 1788.
- (3) 我が国においても良く知られ、又用いられている。その邦語訳の<さんびか>は220番である。(1719年作)

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

- | | |
|-------------|----------|
| 1. 日のてるかぎりは | みくにとかわりて |
| わが主の御代こそ | ときわにさかゆれ |
| 2. 大御名たのみて | ささぐるいのりは |
| かおりのごとくに | みまえにぞ昇らん |

(4) 日本語〈さんびか〉273番 (1740年作)

- | | |
|------------|---------|
| 1. わがたましいを | 愛するイエスよ |
| 波はさかまき | 風ふきあれて |
| 沈むばかりの | この身を守り |
| 天のみなとに | みちびき給え |

(5) 日本語〈さんびか〉224番の1節 (1744年作)

- | | |
|------------|------------|
| 勝利の主イエスの名と | えいこうのかみのくに |
| 四方の民にのべつたえ | ひろめよとの声きこゆ |

(6) 前掲日本語〈さんびか〉273番第3節

- | | |
|--------|---------|
| わが身は全く | けがれに染めど |
| 君はまことと | めぐみに満ちて |
| われの内外を | ことごと潔め |
| つかれし霊を | 慰めたまわん |

(7) 日本語〈さんびか〉142番第3節と第4節 (1707年作)

- | | |
|-------------|----------|
| 3. みよ主のみかしら | みてみあしよりぞ |
| めぐみとかなしみ | こもごもながるる |
| 4. めぐみとかなしみ | ひとつにとけあい |
| いばらはまばゆき | かむりとかがやく |

(8) 原作 (1707年作) の第2行目は次のように変えられて用いられたものもある。

Where the young Prince of Glory died,

尚ここに掲げたものは前掲日本語〈さんびか〉142番の第1節と第5節である。

- | | |
|--------------|----------|
| 1. さかえの主イエスの | 十字架をあおげば |
| 世のとみほまれは | 塵にぞひとしき |
| 5. ああ主のめぐみに | むくゆるすべなし |
| ただ身とたまとを | ささげてぬかずく |

(9) 本項目に関する引用資料は Julian's A Dictionary of Hymnology (London, 1907) 中 "Church of English Hymnology" によるものである。

(10) 熱烈しかも偏狭なカルヴァン主義の牧師で宗教詩人。 Wesley をひどく攻撃し、又互に大論陣を張った。然し本質的にはメソジスト的傾向の人物である。彼の代表作 "Rock of Ages, cleft for me" (1775) は4大さんびか中の一つ

文学的評価による Isaac Watts 及び Charles Wesley の宗教詩の比較

として有名である。

- (11) 詩人 William Cowper (1731—1800) と牧師 John Newton (1725—1807) は自分達の作詩したさんびかを協同で編集出版し、Newton が牧した土地で又 Cowper の静養の地 ‘Olney’ をその名にあてた。Newton の作品 281 編と Cowper の作品 67 編が収められている。Julian’s Dictionary, pp. 867—8.
- (12) Sir Henry William Baker 牧師 (1821—1877) によりラテン語のさんびかとその英語の翻訳を編集したさんびか集。1889年, 1909年, 1916年と夫々改定された。斎藤勇編：英米文学辞典（研究社, 1942年度 P. 403）
- (13) アメリカにおける随一のさんびか学者（1855—1930）で, “The English Hymn” (1915) 及び “The Hymn in History and Literature” (1924) の著者として有名。
- (14) David R. Breed; The History and Use of Hymn-Tunes (New York, 1903), pp. 86—7.
- (15) P.A. Otis; The Hymns You Ought to Know (Chicago, 1928). Wattsの作の4篇は “Our God our help in ages past,” “Jesus shall reign where’er the sun,” “Behold what wondrous grace,” 及び “When I survey the wondrous cross.” 又 Literary Digest (Jan. 11, 1930) p. 31, によれば, London の Methodist Times によって集計した＜愛唱さんびか＞25編中 Watts のもの2編, Wesley のものなしと著されてある。
- (16) Thomas H. Gill; Watts and Wesley Compared, “The Congregationalist” vol.111 (1878), pp. 129 ff.